

楓園

ISSUE 99
2025 1/31

FÛEN [フウエン]
Toyo Eiwa Jogakuin
Public Relations Report

東洋英和女学院
東洋英和楓の会

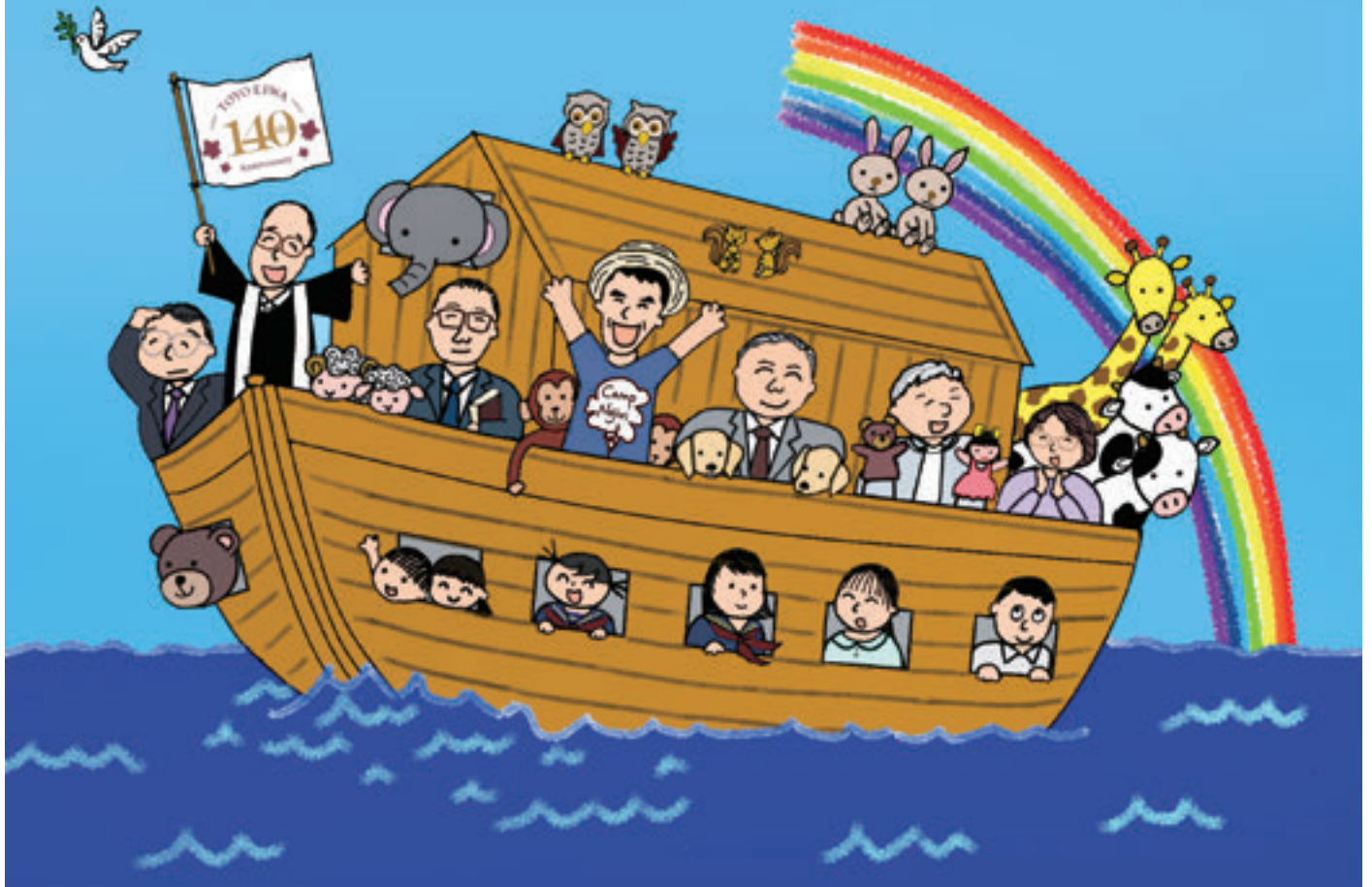
[特集1]

学院創立140周年を迎えて

[特集2]

神さまに育まれている私たち

—自然の中で 遊ぶ・学ぶ・祈る—



学院創立140周年を迎えて



2024年11月6日午前、創立140周年記念式典が挙行されました。また、午後には、10年後の150周年に向けてのパネルディスカッションが開催され、高橋貞二郎新院長が、新しく策定したビジョン「敬神奉仕 Being Active in God's World：神さまから委ねられた世界で、人々のために自ら考え行動する」の意図や込めた思いについて語られました。



「こどもさんびか」を共にささげる小学部児童や学院役職者

140周年記念式典は、小学部の児童、高等部3年生、大学・大学院生、教職員、ご来賓が集い、中高部の新マーガレット・クレイグ記念講堂にて行いました。中学部1年生から高等部2年生までの生徒は、各教室で講堂の様子をモニターで視聴して共に礼拝を守り、東洋英和幼稚園・大学付属かえで幼稚園は各園舎で礼拝を守ること、学院全体で創立記念日を祝い、これまで学院を守り導いてくださった神様に感謝をささげました。

Contents 表紙イラスト：山本香織前小学部長

P.01 [特集 1]
学院創立140周年を迎えて

P.05 [特集 2]
神さまに生まれている私たち
—自然の中で 遊ぶ・学ぶ・祈る—

P.11 From the Garden of Kaede
楓の園から [学院 NEWS]

P.17 *Cartmell's Prayer*
[宗教教育委員会]

P.19 教員紹介

P.21 東洋英和楓の会

「楓園」について皆様のお声を聞かせてください。



聖書の言葉



キリスト教のイメージが「罪」「裁き」「悔い改め」のようなものになってしまうことがあります。でも、どうでしょう、私たちが手にしている聖書にはその最初にこう記されています。

「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」
(創世記 第1章 31節)

聖書にはまず「恵み」が先行しているのです。神がお造りになったこの世界・大自然。神がお与えくださった「私」という一人ひとりの命。大いなる恵みがまず私たちには与えられています。それにどう応えていけるのか、それをどう活かしていけるのか、今日も私たちは問われているのだと思います。

小学部チャプレン 陣内 大蔵

パネルディスカッションで新院長・高橋貞二郎先生が語るビジョンと展望

なぜビジョンが必要なのか？

冒頭、2024年11月1日付で院長に就任した高橋貞二郎先生による就任のあいさつと、先の10年を見据え策定されたビジョンの説明が行われました。

「ビジョン」とは、未来に向けて実現したい目標を端的に表現したものです。では、「ミッション」とはどう違うのでしょうか？

「ミッションとは、学院創立時に決められた不変のものであり、敬神奉仕の精神を身に付け、実践できる人物の育成がこれに当たります。一方、ビジョンとは、時代の変化に応じて更新されるべきもので、未来に示されたゴールといえるでしょう」と高橋院長。

新ビジョンの策定にあたっては、策定委員会が約4か月かけて検討し、決定しました。

「私たちを取り巻く環境は急速に変化しています。東洋英和女学院も、少子化や東洋英和幼稚園・小学部の校舎移転、大学の再編計画などの多くの課題に直面しています。こうした課題に対応しながら前進していくためには、明確なビジョンが必要とされています。ビジョンは、園児・児童・生徒・学生だけでなく、教職員にとっても重要なものです。学校の運営においては、一人ひとりが明確なビジョンを持つことで、皆が同じ方向に向かって力を合わせていくことが大切です」と、新ビジョン策定の意図が語られました。

ビジョンを共有し、さらなる発展を目指す

また、「3人の石切り職人の話」を例に、仕事において未来のビジョンを持つことの重要性が強調されました。物語には3人の石切り職人が出てきますが、仕事に対して不平不満をいう者、金銭のために働く者、教会を造ることに誇りを持っている者と三者三様です。高橋院長は、同じ仕事であっても、どのような意識を持つかに



よってまったく違う目的につながるとし、ビジョンがあれば、たとえ困難な仕事であっても意味と価値を見いだせるのではないかと示唆しました。

また、教職員一人ひとりがビジョンを理解し、実践していくためのネクストアクションについて解説されました。まず全教職員にアンケートを送付し、各部におけるビジョン実現のためのアイデアを検討・提出してもらうこと。また、創立140周年記念募金については、目標額を達成しているものの、今後も継続し、部ごとに適切な使用計画を策定してもらうことを提示。加えて、学院として、ICTやAIに対応した教育プログラムを推進していくこと。さらには、六本木五丁目西地区の再開発事業に関連する東洋英和幼稚園・小学部の校舎移転への対応を行っていくことが述べられました。

創立50周年の折、校長だったミス・ハミルトンが「東洋英和が、高い教育の理想と、キリスト教の世界市民としての真の精神を広めていく学校になる」というビジョンを打ち出し、大きく発展を遂げた東洋英和女学院。

「東洋英和女学院は、宣教師の先生方の精神を受け継ぎ、この先の10年もキリスト教精神に基づく教育機関として発展を目指していきます。皆さんと同じビジョンを共有し、同じゴールに向かうことで、一つの望みを生きる教育共同体として成長してまいりましょう」と、高橋院長は全教職員へ力強く呼びかけました。

創立140周年記念事業

『東洋英和女学院140年史』

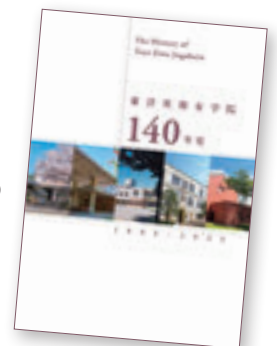
『東洋英和のれきし』が刊行されました

20年ぶりの年史となる『東洋英和女学院140年史』は、ビジュアルも豊富なオールカラー仕様です。東洋英和のこの20年の出来事と、これからの展望を知っていただく上で、欠かせない年史となっております。

また、子ども140年史『東洋英和のれきし』は、前小学部長である山本香織先生が執筆とイラスト作成を手がけました。小学部3年生の社会科授業のテキストではありますが、過去の学院の刊行物や史料が多数参照され、大人にとっても読み応えのある歴史の本です。広く学院関係者の皆様にご高覧いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

『東洋英和女学院140年史』▶

- B5判
 - オールカラー
 - 379頁
- (非売品: 140周年記念募金の返礼として贈呈)



◀『東洋英和のれきし』

- A5判
 - オールカラー
 - 95頁
- (500円: 中上部購買部、Webなどで販売)

敬神奉仕を軸とする東洋英和女学院の未来像



【パネルディスカッション参加者】

高橋 貞二郎 院長

平体 由美 大学国際社会学部長

吉田 太郎 小学部長

大漣 知子 前大学付属かえで幼稚園長

星野 三喜夫 大学学長

楠山 真里子 前高等部長

堤 加壽美 前東洋英和幼稚園長

岡田 光弘 東洋英和幼稚園長

前川 美行 大学人間科学部長

石澤 友康 中高部長



敬神奉仕

Being Active in God's World

神さまから委ねられた世界で、人々のために自ら考え行動する



立場を超えたフラットな議論で 現状分析から在りたい未来を考える

高橋貞二郎院長による説明に続き(p.01-p.02参照)、今回のビジョンを策定した委員会メンバーが登壇するパネルディスカッションが行われました。会に先立ち、司会進行を務める岡田光弘東洋英和幼稚園長は、「ビジョンとは組織が進むための道しるべであり、10年後の在るべき姿を定義して全員で共有するためのものです」とし、新ビジョンが、「現状分析」「在りたい未来像」「価値観の明確化」「ビジョンの言語化」という4つのプロセスを経て決定したことを説明しました。

まず「現状分析」では、策定委員会のメンバーがそれぞれの立場から思いつく言葉やキーワードをポストイットに書き出し、それらの分類作業を行ったことがスライドとともに紹介されました。そのなかで、策定委員会で議題となった、「リベラルアーツとは?」「弱者に寄り添うとは?」という2つの問いについて解説されました。

リベラルアーツについて星野三喜夫大学学長は、「リベラルアーツを訳すと自由学芸、一般教養となります

が、「真のリベラルアーツ」となると意味が異なり、人間が自由に豊かに生きるための基盤といえます。東洋英和が実践してきたのは、女性が自分らしく生きていくための教育であり、まさに真のリベラルアーツであると思います」と述べました。また、弱者に寄り添うことについて大漣知子前大学付属かえで幼稚園長は、「私には「弱者に寄り添う」という言葉がやや傲慢な言葉のように感じられることもあります。それよりも私たちの在り方は「共に」ということではないかと思えます。「共に」は、小さき者、弱き者と共にいて共に歩んでくださるイエス様に倣う生き方です」と語りました。

10年後の「在りたい未来像」については、吉田太郎小学部長より、歴史と伝統をしっかりと守った上でアップデートしていくことや、子どものうちから本物に触れることの重要性が提示されました。前川美行大学人間科学部長は、東洋英和の一貫教育に触れ、「小さい頃から命や心を大切に教育を受けた人が、大学でケアする側の専門知識や国際性を身に付け社会へ出て活躍する一貫教育は、東洋英和が誇れることの一つではないでしょうか」と語りました。



冒頭では真のリベラルアーツ教育や弱い者とともに生きることなど、東洋英和が大切にしていることの解説がありました

未来へ向けて何を継承するか 実現したい東洋英和の姿を考える

未来へ向けて何を継承するかについては、策定委員会で白熱した議論が交わされたことが紹介され、「キリスト教教育」「人格教育」「学業・実践」「姿勢」という言葉が挙げられました。

堤加壽美前東洋英和幼稚園長は、「キリスト教教育・保育をなくしてはいけないことは、皆の意見が一致した



「在りたい未来像」に関して、歴史と伝統を守った上でアップデートしていくことの重要性が確認されました

ところです。加えて、敬神奉仕を実現する人となるための教育を大切にしていくこと。多様な個性は神さまが与えられた賜物であり、互いの個性を認め合い、育ち合う環境を確保すること。教科の勉強だけでなく、試行錯誤したり失敗したりする経験の必要性についても皆で話し合いました」と語りました。

さらに、未来へ向けて実現したいことの一つとして挙げられたのが、学院の一体感を強めること。教職員がミッションである敬神奉仕について共通認識を持ち、各部の教職員同士、また園児・児童・生徒・学生が積極的に交流し、学び合える関係を築いていきたいと説明されました。学院の一体感を強めるための礼拝について平体由美大学国際社会学部長は、「大学は六本木と物理的に距離があり、キリスト教の浸透においても差があるように思います。ですが、大学も礼拝を大切にする姿勢は同じであり、キリスト教教育の中心に礼拝を置いていくことに変わりはありません」と述べました。

また「人格教育」については、「神さまの前に立ったとき、自分はいかに小さな存在であるかを知り、奉仕をすることで自分自身を見つめ直していく人間形成が大切だと考えています」と吉田小学部長。「学業・実践」については、石澤友康中高部長が解説を担当。「今行われている21世紀型の教育は、単なる知識習得ではなく、課題を発見し問題を解決する力、そして未来を想像する力が重視されています。これからの時代は、野尻キャンプのように、実体験や他者との交わりを通して子どもたちが自ら行動し、何かを創造することの価値がさらに高くなっていくと考えています」と述べました。

苦難のときも決して手放さなかった ぶれない「軸」をこれからも守っていく

次は「価値観の明確化」において、東洋英和としてぶれてはいけない軸は何であるかが明らかにされました。

東洋英和女学院は、幾度となく苦難を乗り越えてきましたが、最大のピンチが1899年の文部省訓令第12号といわれています。楠山真里子前高等部長は、「訓令12号が発令されたのは、東洋英和学校(男子校)と東洋英和女学校(女子校)とがあった時代です。キリスト教教育を放棄して高等学校入学や徴兵免除の特典を保つか、キリスト教教育を守る代わりに特典を受けないか選択を迫られました。その際、東洋英和学校はキリスト教の看板を下ろした男子校となりましたが、東洋英和女学校は当時校長だったミス・ブラックモアが、女子教育とキリスト教の精神を貫きました」と解説。また永坂孤女院の例を挙げ、ミス・ブラックモアをはじめとする宣教師の先生方は、敬神奉仕を行動で示すことを重視していたと紹介しました。

石澤中高部長は、次の150周年だけでなく、200年、300年の周年も見据え、敬神奉仕という軸を大切にしながら、学校として選ばれるためにその時代に合った教育を模索し、実践することが大切であると強調しました。加えて、高橋院長は、教職員一人ひとりが敬神奉仕を心にとめ、礼拝や説教集を通じて学び続けることで、園児・児童・生徒・学生へ敬神奉仕の精神が伝わっていくと語りました。

約4カ月にわたって議論を重ね、「ビジョンの言語化」をしたものが、「敬神奉仕 Being Active in God's World: 神さまに委ねられた世界で、人々のために自ら考え行動する」。東洋英和の軸である敬神奉仕を頭に据え、学院が目指す方向性が具体的な言葉で示されました。最後に「策定したビジョンを達成するためには、皆さんのアクションが重要になってきます」と語った司会の岡田東洋英和幼稚園長。ビジョンを理解した上で、どのような行動に落とし込んでいくのかは、教職員一人ひとりの判断にかかっていると、パネルディスカッションは閉会しました。



ビジョン達成のためには学院に関わる一人ひとりのアクションが重要であると締めくくられました

神さまに育まれている私たち

—自然の中で 遊ぶ・学ぶ・祈る—



春に実をつける園庭のびわや黄色く色付く校庭のイチヨウなど身近に四季の移ろいを感じ、
野尻キャンプや追分寮で雄大な自然の中で仲間と協働した経験を通して
子どもたちは自分もまた、自然の一部として神さまに育まれていることを知ります。

敬神奉仕と自然

石井次郎先生ⁱ(1972-1976在職)は、『野尻野外教育施設の由来』(1975)のまえがきの中で、東洋英和を「人生の全行程を、『敬神・奉仕』のプリンシプルにのっとり走りぬくための人間教育を目的として存立する学園」と表現し、「そのために(自然豊かな)校外の施設で行なう教師と生徒の共同生活を極めて重要なものとして」きたと言われている。それはその後続く、長野彌先生ⁱⁱ(1933-1972在職)の体験的で具体的な場面の描写で綴られた野外教育の効用を語った文章中にも現れており、東洋英和の生徒にとっては敬神奉仕を全身で体感できる場として自然の場が用意されていたということであろう。

学院は緑深き野尻と追分の2カ所に校外施設を持っており、以下は、石井先生が校外施設に生徒を送った時の文章であるが、長野先生の想いも、ここから遠くないと察せられる。「(私たちは)創られたままの姿をなお留める自然の中へ立帰って、創造主のことを想い、また御手のわざのことを想うだろう。そして、生きる喜びと感謝とを新たにするとともに、生きていく勇気のが内に漲ることをおぼえるだろう。なぜなら、御手のわざなる自然が私たちに呼びかけるからだ。一中略—私たちは、その呼び声にこたえて、『いかに生きべきか]、また、『美しく善き人生]をいかにして勝ちとるべきか想いめぐらすであろう。(下線は筆者による)』と書いている。

社会の中で他者と共に人生を切り開き、挫折することなく生き抜いていくためには、深い自然に抱かれた場での共同生活体験が必要であるという考えである。

こうした人格教育への効果は、その後、文部科学省

大学付属かえで幼稚園長
山下 久美



が行った研究ⁱⁱⁱ(2002,2005,2010,2016)により、明らかとなっている。この研究で分かったことは、子どもの頃の自然体験が多い人ほど道徳観(向社会的な想い)や正義感があり、物事(勉強含め)に対しての意欲があり、人とのコミュニケーション能力が高まるということであった。また困難に際して、柔軟に立ち向かう耐性も高いという^{iv}(2017)研究報告もある。

深い自然の中で過ごす効果はさまざまあり、園児や生徒に与える影響は大きいと思われるが、このような研究結果を俟たずして、長野先生と石井先生は、その意味や効用を理解しておられたことになる。信仰者として謙虚に自然と向き合い、対話し、他者と共同生活をすることで得られていった体験的知見であったのだろうと想像する。

校外施設より近く、日常的に使用できる豊かな自然が大学には残されている。横浜校地を学院全体で利用する頻度を上げていくことを考えたい。



i 4年間、院長を務めた。

ii 延べ41年間、物理・数学教師、教頭、校長、院長、理事長、名誉院長として務めた。

iii 文部科学省委託研究 学習意欲に関する調査研究 2002、国立青少年振興機構 青少年の体験活動などに関する実態調査 2005、国立青少年振興機構 子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実 子供の体験活動と資質・能力の関係2010、子供の体験活動と意識の関係2016

iv 佐々木太郎・大谷哲朗 自然体験活動とレジリエンスの関連性 心理相談センター紀要 第13号2017



自然を活かした保育者 (幼稚園教諭・保育士)養成

人間科学部 保育子ども学科主任
山本 真実

横浜キャンパスには三保の森と新治の森という2つの森に挟まれており、自然林や湧き水による溜池が残っています。この自然を活かした保育者養成の学びは、一教員のゼミ活動から始まり、その後は「もりっこ」と名付けてかえで祭(学園祭)等の大学行事の中で近隣の子どもを招いて行う自然遊び体験活動として行われていました。2012年からは横浜市の助成を受けながら、学生の学びと地域の子どもたちへの自然活動の提供を行ってきました。森の散策をしながら鳥の声を聞き、虫や植物採集などを行ったり、森の自然物を利用し

た制作や「森の恵みをいただく」として食べられる山椒や茗荷等を学生たちが天ぷらやすまし汁にして親子で楽しんでいただく企画等を行ってきました。これらの活動は、自然体験活動を提供できる保育者の養成として本学の独自性と専門性を高めてきました。また自然体験提供の実践力を持った保育者を現場に送ることで、次世代を担う子どもたちの意識向上にも貢献してきました。今後は保育子ども研究所の「こどもの広場」の企画の1つとして、キャンパスの自然環境を活かした活動を継続していくよう検討しています。



摘み取った植物を並べて下敷きにするため並べました



水辺では見えない生き物を探すのに集中!



雑木林にはたくさんの木の葉が落ちています



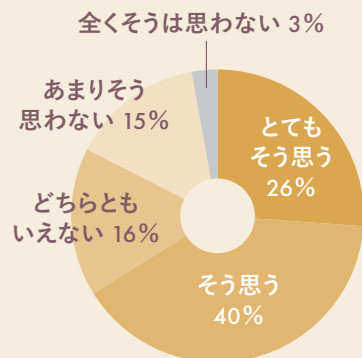
大学の自然環境に対する学生の意識

在学生対象に、大学キャンパスの自然環境に関するアンケート調査を実施した結果の一部をご紹介します。まず、全回答者の約99%が「キャンパスは自然豊かだ」、それは「良い環境」(約80%)であり、「好き」(約70%)と答えています。一方「自然環境が大学での学びに役立っている」と考えている学生は全体では約66%、特に保育子ども学科の学生に限れば約94%と非常に高く、教育実践の中に深く活かされていると実感していることが伺えます。また、「大学の自然環境がキャンパスライフにとって大切か」という質問には、学科の差はなく約75%が大切と回答しており、多くの学生にとって自然が大学生活の大切な一部になっています。本学を選ぶ際に自然を含むキャンパスを理由の中に考えた割合は38%程度であり、学生の意識は、実際の大学生生活・学びの中で実感されてきたものと考えられます。



お気に入り自然スポット1位の
図書館地下2F

キャンパスの自然環境は
大学の学びに役に立っている



大学キャンパスの自然環境についてのアンケート
人間科学部人間科学科 小林能成准教授調べ



大学の自然の中の恵みを園に持ち帰って

大学付属かえで幼稚園教諭
飯島 有佳



時間をかけてタケノコが掘れました



たきあがったタケノコごはんをのぞき込む子どもたち



池の中をよく見てオタマジャクシやエビを捕まえます



2024年4月、年長組の子どもたちと一緒にたまプラーザ駅から電車とバスを乗り継いで東洋英和女学院大学に遠足に行きました。

■竹林では……

大学の森の中を歩き竹林に入ると、子どもたちは空に向かって生えて高く育っている竹を「高い」と見上げていました。竹林では誰もいない方向に向かって木の枝や石を投げて耳を澄ませました。石や枝が竹に跳ね返って「コーン」と高い音が鳴ることもあれば、竹に当たらずに土に落ちた鈍い音がすることもありました。時々、跳ね返った石がいくつもの木に当たり「コーン、コーン」と小さな音が重なります。「あ、今3回当たったね」と子どもたちもにっこりと笑い合っていました。

しばらくしてタケノコ掘りを始めると子どもたちは土から頭を出したタケノコを見つけては大きな声で「タケノコ、あったよー」と周りに知らせます。そして枝や指先を使って掘りだしのお手伝い。時間をかけてやっと掘れたときには嬉しそうに「ほれたー」と声出しながら、持ち上げていました。

タケノコは幼稚園に持ち帰って、子どもたちと皮をむ

き、わかめと一緒に煮込んだ若竹煮やタケノコごはんを作って食べました。大学から持ち帰ったタケノコは「ほっぺが落ちちゃいそう」「おかわりしたーい」と特別なおいしさでした。

■池では……

森を抜けたところの池で、子どもたちは網を使ってオタマジャクシやエビやヤゴを捕りました。池の水はとても澄んでいるので池に近づくとオタマジャクシやエビが泳いでいるのが見え、大喜び。池に落ちないように気を付けながら手を目一杯のばして池の水を掬いました。そして、網の中をじっと見て「あ、いたっ」と大きな声で言い、オタマジャクシを手にものせて周りを見せていました。オタマジャクシはその場で水槽に入れてしばらくの間観察をしました。子どもたちは「これから足がはえるのかな?」「たくさん捕まえたね」とうっとりとした様子で水槽を眺めていました。その日、オタマジャクシとエビは幼稚園に連れて帰りました。それから数週間子どもたちは「後ろ足が出てきたよ」「しっぽが短くなってきたね」「そろそろカエルになるかな?」と日々の変化を観察して楽しみました。



びわ茶作り



東洋英和幼稚園教諭
高柳 うらら

5月の終わり頃、裏庭にびわの実が落ち始めました。下から見上げると、ぽつぽつと色付いた実が見えます。子どもたちは木に梯子をかけて登り、長い棒でつついてみますが、なかなか採れません。上の方にはまだ熟していない実も沢山ついていました。

6月になり、びわ採りをするために年長組の子どもたちと幼稚園の屋上に上がってみると、ほとんど実がなくならず、屋上には沢山の種だけが残っています。不思議に思った子どもたちはお家の方に相談したり警備員さんに尋ねたりしながら、「びわの実を食べたのは誰だろう」と一生懸命調べました。

びわの実は「誰か」に食べられてしまいましたが、代わりに大きな籠いっぱい集めたたくさんの葉を使ってのびわ茶作りを子どもたちに提案しました。葉の裏側にある白い細かな毛を歯ブラシで擦り、きれいに磨いたら、逆さに吊るしてパリパリになるまで乾かしておきます。数日後、「もう乾いたんじゃない?」と葉を触って確認すると、もう少し時間がかかりそうでした。

葉がすっかり乾ききったある日。年長組の部屋で、びわ茶をごちそうする準備を始めました。子どもたちはびわの葉を真剣にちぎります。細かく、細かくちぎった葉を網の袋に入れて口をしぼり、水の入ったやかんの中へ入れ火にかけます。ぐつぐつ沸かすと、うす橙色に色付いたびわ茶のでき上がりです。「いらっしゃいませ」「びわ茶はいかがですか」びわ茶屋さんが開店しました。ほのかにびわの香りがする美味しいお茶をみんなに振る舞います。この経験から9月(2024年)の祖父母を招く日にはびわ茶を淹れ、おもてなしをする子どもたちもいました。

10月に入り柿の実が色付き始めると、「今度こそは食べたい」と子どもたちは柿が「誰か」に食べられないように知恵を絞りました。そして、赤く色付いた美味しい柿をみんなにいただくことができました。自然は私たちの思い通りにはなりませんが、神さまの与えてくださる実りと豊かなご計画に感謝したいと思います。



木に梯子をかけ、代わるがわる実をつつきます



びわ茶屋さんに年中組のお客さんがやってきました



自然と共に学ぶ教室



小学部教諭
北村 佳瑞葉

クラスには、小さな虫博士や植物博士がたくさんいます。彼女たちにとって、校庭はまるで自然の博物館のような特別な場所です。休み時間後、満面の笑みで教室に戻ってくる彼女たちの手の中には、校庭で見つけた「お宝」が。柿の実や植物の種、時にはヤモリや玉虫など、自然の与えてくれる恵みが詰まっています。

ある日、ひとりの子どもが教科書に登場した「ふきのとう」を学校に持ってきてくれました。教科書で見た植物が目の前に現れたことに子どもたちは驚き、教室の空気が少しだけ変わりました。しばらくして、その様子を見ていた別の子どもが、『いなばの白うさぎ』に登場する蒲の穂を持ってきてくれました。そこで、蒲を電子黒板に投影し、クラス全員の前で解剖を始めることに。持ってきた子どもは、「どこで見つけたか」「季節ごとにどんな変化をするか」などをクラスの人々に説明してくれました。子どもたちは、実際に蒲の種を手に取り、その数や色、香り、手触りについて話し合います。みんなで一緒に蒲の内部を観察し、驚きと発見を共にする時間は、まさにクラス全体が一つになる瞬間でした。

その後、蒲の種を植えて観察したいと、鉢植えを作ってくれた子どもも登場。そして、また別の日には、校庭で柿を拾った子が「この柿、みずみずしいけれど、放ってお

いたら腐っちゃうかな?」「干しておけば干し柿になる?先生、試してみようよ!」と、次々に疑問を投げかけ、干し柿づくりに挑戦しました。結果的には上手に干し柿を作ることはできず、日に日に柿は変色して腐ってしまいましたが、これもまた学びの一つです。失敗を経験しても、新しいことを試みる喜びは変わらず、子どもたちのわくわくは止まりません。このような日々を通じて、それまで自然に関心を持たなかった子どもたちにも、次第に学びを深める輪が広がっていきました。

自然は神さまが創られた世界であり、ふきのとうや蒲、柿など、どれも神さまが私たちに与えてくださった贈り物です。ふきのとうが季節を知らせ、柿が腐っていく過程は、命の儚さとその大切さを教えてくれます。子どもたちは、自然の営みを通して、神さまの大きな計画の一端に触れているのです。

クラス全体に広がった自然への興味と学びは、神さまの愛と恵みが広がっていくように、教室の中を温かく包んでいます。今日も、お日さまと大地のいぶきの中に、小さくも力強く生きている子どもたち。神さまがお創りになったこの世界の中で、自然のかけがえのなさを身体いっぱいに感じながら、成長して行ってほしいと願っています。



夏期学校1日目。軽井沢・湯川ふるさと公園にて



わたし、蒲の解剖します!



小さな種から

元高等部教諭
遠藤 洋子



訓練キャンプのキャンプファイヤー薪組み講座



野尻キャンプの選択プログラム・カヤック

野尻キャンプの魅力の一つは、「卒業生リーダー」です。植える人がいて、水を遣る人がいて、育ててくださる神様がいてくださるよき土の野尻に、植え続けられる種が途切れないように願ってリーダー心得の話をしてきました。「建物や設備はお金があればできるけれど、人材育成は時間がかかる」という石井次郎元院長の言葉は今でも心に残っています。

リーダーを育てる訓練キャンプでは、楽しむだけのキャンパーからリーダーに立ち位置を変え、プログラムの準備・管理作業を行い、リーダーの役割や必要な資質・心得について学びます。本気でリーダーを目指す参加者は、体験で気づいたこと・考えたことを、ひたすらメモをとり各自の「小さな種」にします。

リーダーとなった卒業生は、プログラムの補助や指導からキャビンの生活まで、キャンプ全体をサポートしま

す。本業の学生として学識を深め、視野を広げながら、常日頃から「これキャンプで活かせるかも」と「いろいろな種」を増やしています。キャンプ好きな後輩が増えることを願い、「去年よりもっとできることがある」という情熱や好奇心を忘れず、野尻に帰ってきてくれる彼女たちだからこそ、後輩から頼られ、憧れられる存在になるのです。

訓練キャンプのリーダーの1人が、「私も先輩から多くの種を教えてもらいました。受け継いだものを後輩に伝えたいし、それが使命だと思う」と語っています。リーダーからリーダーへも、「大きな種」が力強く引き継がれ、野尻の魅力を「豊かにする種」になります。

野尻キャンプの意義を理解したキャンパーがリーダーとなって帰ってきて、また次のリーダーが育つ……このサイクルが宝の1つだと思います。

2024年度野尻キャンプでリーダーを務めた卒業生に聞きました！

Q.野尻の環境だからこそできることは？

- リーダーとして人の命を預かる環境なので、周囲への目配り、自発的に行動する力が普段とは比較にならないほどつく。
- 一人が完璧にできなくともお互いに補いあえばよいこと、周りをよく見て気配りできるようになることを学べる。

Q.東洋英和にとって野尻はどんな場所？

- 人の心の温かさ、自然の素晴らしさ、歴史のつながりを肌で感じられる場所。
- 自分の素を出すことができ、自己肯定感を高められる、お互いを認め合える温かい場所。
- 普段なら荷が重いと思うことにも挑戦する勇気を与えてくれる場所。

From the Garden of Kaede

楓の園から[学院NEWS]

保護者の方も
園児を送りがてら、
一緒に銀杏を
拾ってくださいます。
洗って乾かしてから、
七輪で炒って
おいしくいただきます。

東洋英和幼稚園のイチヨウ



東洋英和幼稚園

子どもたちの観察日記

園長 岡田 光弘

「おはようございます」

朝の職員朝礼(祈祷会)を終え正門に向かい幼稚園の玄関を出ると、すでに数人の子どもたちと保護者の方がいらして、挨拶を交わします。玄関に一番近い部屋は年少組なので、一番小さな子どもたちと挨拶を交わすことからスタートします。幼稚園に来る途中に拾った葉っぱや木の実を宝物のように見せてくれる子もいれば、恥ずかしそうにお母様の後ろに隠れる子もいます。すでに遊びも始まっていて、ダンゴムシを手のにせて見せてくれる子もいます。

今年の3月まで小学部の教員だった私は、30年以上も女の子だけを見てきたので、男の子の存在はとても新鮮です。年少の男の子の中には、裏庭にあるヒューム管(土管)の上から私に向かってジャンプして飛びついてくる子もいます。その男の子は、飛びついた後は満面の笑みを浮かべてまるでアトラクションを楽しんだかようですが、こちらはキャッチし損ねて怪我をさせたらと思い、必死です。でも、男の子の満面の笑みを見ると、こちらも思わず笑顔で「楽しい?」と聞いてしまいます。

年少組は、裏庭で遊びます。ある時、四角い木の遊具をたくさん使って宇宙船ごっこを始めました。私も宇宙船に招待されて乗り込んだのですが、運転手の子が「〇〇へ出発します」と言った後になかなか出発しません。運転手の子にしてみると、出発するにはいろいろな手順があるようなのですが、なかなか出発しないっていると乗客の子が文句を言い出します。それでも出発しないと、運転を代わるように言われてしまいます。そこで、運転手が交代したのですが、運転手が交代しても宇宙船は出発しないで遊び時間は終了。この続きは明日に、ということもよくあるようです。互いに思いを主張し合いながら、気持ちを分かり合えるように成長してほしいと願っています。



裏庭のヒューム管(土管)で思い思いに遊ぶ年少児

大学付属かえで幼稚園

木工と子どもたち

担任 田中 百合

かえで幼稚園では創立当初より今に至るまで、木工を遊びの一つとして大切にしてきました。

4・5歳児は、自由に遊びを選択できる時間に、木工室へと行くことができます。友だちと一緒に連れだって行く子どももいますし、一人で行く子どももいます。木工室では隣にいる友だちのことを感じながらも、一人ひとりが木と向き合っています。

玄能で板に釘を打つと、トントンと音が響きます。鋸で板を切る時も、ギコギコと音がします。木工室は庭の砂場に面しているのです、その音を耳にした3歳児が「何をしているの?」と、木工室を覗いてじっと見ている姿もあります。例年3歳児が木工室に入るのは3学期以降ですので、「もう少し大きくなったら木工室に行ける」という憧れをためて、楽しみに待つことを経験しています。

木工室で子どもたちと一緒に過ごしていると、子どもたちの息づかいを感じ取ることができます。ある朝Aちゃんが厚さ9ミリ長さ10センチほどの板を、木工台にしっかり固定し鋸で切り始めました。紙をハサミで切ることは違い、すぐに切れるものではありません。足をふみしめて鋸

で引くたびに、木くずが床に落ちていきます。とても良い木の香りに包まれます。手を動かしては止め、切り口に目を近付けてどのくらい切り進んだかを確認し、また手を動かします。Aちゃんは「速く動かし過ぎると、斜めに切れちゃうんだよね」と、誰にでも言うでもなくつぶやいています。じっくり時間をかけて板を切り終えた時Aちゃんは、「ふー」と大きく肩で息をしました。私が「切れたわね」とことばをかけると何とも嬉しそうです。その後Aちゃんは、自分の切った四角い板にやすりをかけ、木っ端を釘でつけて恐竜に見立てました。

子どもたちは木工を通して時間をかけて取り組み、「これでよし」と思う喜びを感じています。



木に向き合う子どもたち

小学部の夏期学校 ～伝えていくということ～

体育科教諭 谷口 こゆき

小学部の夏期学校は、学年によって全く異なる雰囲気がある。私は2年生と6年生で行く追分が一番好きだ。4月に入って1年生が入学し、小さいけれど頼もしいお姉さんになった2年生。ところが、6年生とともに追分に行くと、6年生に甘えて可愛らしい妹に大変身するのである。6年生も最上級生として学校生活の主軸となっているが、2年生との追分では小さなお母さんに大変身するのである。一緒にベッド作りをしたり、廊下や庭で遊んだり、野に咲く花を摘んだり、夜の集いの劇を作ったり。そしてメインイベントは6年生がカレーライス、2年生がランチョンマットを作り、庭のテーブルでともにいただくお昼ご飯。1泊で先に帰る2年生とのお別れの儀式もしんみりと。ぎゅっと大好きなお姉さんに抱きつく2年生を見ると、少し目頭も熱くなる。

神さまがお創りになった自然の下で、家族から離れて生活することにどんな意味があるだろうか。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネによる福音書15-12)という聖句を中心に、幼い下級生と上級生が共に手を取り合い過ごすことは、まさに隣人を愛し、奉仕することを学ぶ場となるであろう。協力することや教え諭すことの、楽しさや難しさを経験することは、この先の人生で乗り越えられそうにない壁にぶつかった時、きっと解決するための糸口につながるであろう。そしてこうやって体験したことを2年生は6年生になった時に、幼い2年生にまた伝えていくのである。

東洋英和女学院が、その創設時から寄宿生を受け入れ、異年齢での集団生活を通して学び成長してきたこと。その意義を私たち一人ひとりが意識を持って引き継いでいかなければならない。



朝の体操も一緒に楽しみました



手作りのランチョンマットで、6年生の手作りカレーライスをいただきます!

【日記・作文より抜粋】

【2年生】

- 6年生のお姉さんとベッドをつくりました。お姉さんがとてもやさしくしてくれてうれしかったです。
- 6年生がつくってくれたカレーはすごくおいしかったです。私も6年生になったら、2年生につくってあげたいです。

【6年生】

- 私が2年生の時は、6年生のお姉さまと遊びたかったので一緒に遊ぼうと思い、最後の日に2年生と遊びました。2年生も楽しんでくれたみたいで、少しは仲良くなれたかなと思いました。



大好きなお姉さまとの別れはしんみりと……

「敬神奉仕」の第一歩 中1オリエンテーション

図書科司書教諭 植田 亜里沙

八ヶ岳と南アルプス、富士山を見渡せる自然豊かな清泉寮。ここで、今年度も中学部入学後最初の宿泊行事である、中1オリエンテーションが行われました。学年の仲間たちと3日間を共にして親睦を深めるとともに、協働を通じて「神様と人との交わり」を学び、「まわりの人のために何ができるか」を考える、敬神奉仕の第一歩となる行事です。

■善きサマリア人から学ぶ「尊厳」

3日間を通して行うプログラム「聖書に学ぶ」では、毎年、ルカによる福音書10章25節～37節の「善いサマリア人」を通して「敬神奉仕」の理解を深めます。そこから「尊厳」という視点を導き出し、日常生活と聖書の教えを結びつけて考えられるワークショップを行いました。その中から、生徒たちの印象に強く残った2つの活動を紹介します。



「聖書に学ぶ」のひとつ。しおりを使ってYes/Noの意思表示をしています

1つ目はくじで決まった「隣人さん」に、行事の3日間のどこかで関わりを持つという「隣人さんゲーム」。ここでは自分の「隣人さん」が誰であるか、周りの人にも、本人にも知られてはいけません。あくまで自然に、普段の行動の延長線上で「隣人の力になる」にはどうしたらいいか、生徒たちは試行錯誤しながら過ごしていました。

2つ目は「尊厳ワークショップ」です。尊厳が尊重されている場面と侵害されている場面を班ごとに考え、寸劇にしました。行事のリーダーを決める、遊びに行く約束をするなど、日常生活のさまざまな場面を例にすることで、自分と他者の「尊厳」を考えるきっかけになったようでした。

■五感で自然を感じる

2日目の午後には、自然体験プログラムを行いました。このプログラムでは、レンジャー（自然案内人）の方の案内で清泉寮の周辺を散策しながら、五感を使って自然とのふれあいを楽しむ体験をします。



自然体験中の一コマ。鹿の角を発見！

体験内容は、植物やいきものの観察、植物を使ったミニ実験、草花ステンシルでしおり作り、葉っぱの色比べなど、班ごとにさまざまでした。体験の最後、生徒たちは思い思いの場所でシートを敷いて地面に寝そべり、木の葉擦れや鳥の鳴き声を聞き、草のにおいを思い切り吸い込んで、雄大な自然を全身で感じました。慣れない中学生活、充実しつつも慌ただしい日々から少し離れ、心身ともにリラックスできるひと時となったようです。



シートに寝そべり、自然を感じます

豊かな自然から神様の御業を感じたことで、いつも以上に、聖書の言葉と真摯に向き合うことができた3日間となりました。

自然共生社会に向けてアートの新たな可能性を拓く

人間科学部 保育子ども学科 准教授 三上 慧

2018年に本学に就任して以来、保育者養成の一環として「木育」を主要な研究領域に据え、五感で自然の恵みにふれる体験を配慮した造形表現のあり方を探究しています。「人と自然の共生や環境を大切にする心」「五感で捉える豊かな感性や表現力」「日本の木の文化や生活スタイルを考える探究心」「他者と心を通わせる地域・社会交流」を促す木育には、環境、地域、社会、文化についての学びと人を育む点において、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) との相性のよさが感じられます。これまで学内外で実践してきた木育とESDをつなぐさまざまな活動は、参加者が自然の恵みを素材にして創造的に生み出す表現力、持続可能な社会を生きる力となる資質・能力、他者を思いやるコミュニケーション力や人間性、人と自然の共生や環境保全への関心などを高める場となっています。特に、自律的・協働的・省察的に子どもの支援役を担う大学生にとっては、各自の思考法や専門性、地球市民性を向上させる大事な機会となることが注目されます。

変化が激しく複雑で先行き不透明な今日の社会では、既存の価値観やモデルに捉われず、独創的なイノベーションの創出ができる人材の育成が求められます。これを踏まえると、大学の美術教員が地域の人々や団体との連携で果たす役割も重要となりそうです。大学と横浜市緑区との連携として、2021年から子どものまちづくりイベント「Mini Mini Midori」(緑区主催) に専門性の多様な英和生がボランティア参加しています。2022年から2024年にかけては、会場内に東洋英

和の木育ブースが設置され、英和の森の竹を主な素材とする造形活動(手のひらサイズの竹風鈴をつくる過程で、音・色・形・動き・香りを感じるなど)を子どもたちは楽しみました。竹を使うことが、どのようにSDGsにつながるかなど、大学生も体験的に学びを深め、竹の魅力や面白さを子どもと共有できたことは、大変喜ばしいことでした。加えて、2022年から私が講師を務める「ようこそ英和の森へ! 緑いっぱい🍁 わくわく造形あそび」(緑区主催) では、地域の親子を大学に招き入れ、保育者志望の大学生と共に造形あそびを体験する木育プログラムを重ねております。ご家族で英和の自然を全身で感じる、また子どもが独創性を発揮しながらアート思考を活性化するひとときとなるように、英和生との協働で進行を担当して参りました。デザイン思考を活用し子どもや保護者の気持ちに寄り添う大学生には、専門的な気づきや意識の変容が見られました。これまで取り組んだその他の木育実践も含めて省みると、自然教育とアートとの親和性、参加者のウェルビーイングへのつながりが窺われます。

社会情勢の変遷と併せて、幼児教育・保育のグローバルな動向も視野に入れる必要があると考えます。子どもはこれからの社会を変革していく主体であり重要な担い手と見なされています。その力の育成の基盤となる幼児期に携わる自らの立場を認識し、今後とも効果的な木育デザインを英和生と共創・実践しながら、政府が目指す2050年ビジョン「自然共生社会」に向けて、アートの新たな可能性を拓きたいと思えます。



横浜キャンパスの森で竹を切る学生たち



大学の図工室で竹を割り加工する学生たち

東洋英和女学院

〈桜プロジェクト〉植樹10周年カナダツアー報告

〈桜プロジェクト〉10周年ツアー実行委員会代表 前小学部長 山本 香織

同窓会有志が発足した〈桜プロジェクト—ありがとうを桜に託して〉により、2014年6月、カナダの地2か所に植樹された桜たちは、今どうなっているでしょうか。

植樹5周年ツアー（2019年5月）に続き10周年ツアーが、高橋貞二郎副院長（当時）と同窓生、旧教職員、計15名により2024年5月9日～15日に実施されました。年代もまちまち、初顔合わせであってもそこは英和生。高橋先生も加え、すぐに愉快的「桜3組」となりました（ちなみに植樹ツアーが「桜1組」、5周年ツアーが「桜2組」）。

ソロルド市の「カートメルウェイ」と名付けられた桜並木のヤマザクラは、5周年の時はひ弱に見え、不安すら感じましたが、今回美しく花開く姿を見せてくれました。またもう1か所のハミルトン市センテニアル公園（別名・桜公園）の桜がすでに満開を過ぎていたのですが、思いがけず、ハミルトン市営墓地に学院創設者ミス・カートメルの墓所を訪ねた時、墓碑の真上のヤエザクラがちょうど色鮮やかに満開！一同歓声を上げました。

そして桜だけでなく、今回も私たちはカナダの皆様のおもてなしに迎えられました。ソロルド市では市長をはじめ、カートメル家の縁戚の方々。ハミルトン市ではセントポールズ教会の皆様、桜公園での10周年記念式典に参加された方々。多くの皆様から、桜の贈り物への感謝と、温かい友情とをいただき続けました。

カナダと東洋英和とのつながりは「歴史上の出来事」ではなく、記念として残すものでもありません。カナダの地で立派に成長し、市民の皆様には喜ばれている桜たちのように、カナダと英和の絆も、未来に向かってますます育っていくことを願っています。



カートメルウェイにて



桜公園の桜たち(2024年4月)
撮影:〈桜プロジェクト〉を支えてくださっている現地在住、有賀誠一牧師

後援会



後援会会長
就任にあたって
後援会会長
安部 眞一

この度、井上会長の後任として、学院のご推薦と役員会の承認を賜り、後援会会長を務めることとなりました安部でございます。

娘たちが日々、この学び舎で成長していく姿を見守ることができるのは、私たち保護者にとって何よりも大きな喜びです。

私たちが願うのは、生徒たちが愛情あふれる環境で、真の強さと美しさを育んでいくことです。世の中の厳しさに触れるのは、彼女たちが成長し、社会に出ていく時で十分です。それまでは、安心して挑戦し、多くの経験を積み重ねてほしいと心から願っています。後援会の役割は、在校生が安心して学び、成長できる環境を提供することです。

これからも、皆さまと共に、娘たちの未来を支えていけるよう努力して参ります。皆さまのご協力とご支援を心よりお願い申し上げます。そして、娘たちがここで過ごす時間が、かけがえのないものとなるよう、一緒に素晴らしい学び舎を築いていきましょう。



後援会会長
退任にあたって
前後援会会長
井上 貴之

東洋英和女学院の後援会会長を退任するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。初めは重責に身の引き締まる思いでしたが、95年の歴史を誇る後援会の会長を務めさせていただいたことを今は誇りに思っております。私には3人の娘がおり、長女の小学部入学から三女の高等部卒業まで、19年間にわたり東洋英和女学院と深く関わり、私も父としてたくさんのお話を学ばせていただきました。それもこれで終わりかと思うと寂しく感じます。後援会においては副会長を1年間、そして会長を3年間務めさせていただきましたが、会長在任期間の半分はコロナ禍の影響で活動が制限され、残念ながら多くのことを成し遂げられませんでした。しかし、今後の後援会活動に新たな風を吹き込むことができたと自負しています。安部新会長の下、後援会の活動が引き続き高い熱量で進むことを確信しております。

これまでの皆様のご理解ご協力に深く感謝申し上げますと共に、これからも後援会に変わらぬご支援をお願い申し上げます。

卒業生が翻訳した

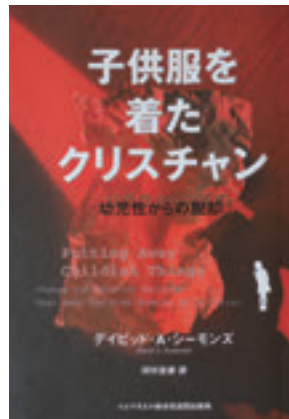
キリスト教関連の書籍紹介

今回は、キリスト教神学と臨床心理学の関係に興味を持たれ、大学院で研究された方と翻訳書をご紹介します。さまざまなことに挑戦する勇気を与えてくれる、「英和生へのメッセージ」(音声)もぜひお聴きください。

子供服を着たクリスチャン — 幼児性からの脱却

訳者: 河村 従彦 (2016年 大学院人間科学研究科 博士(人間科学)取得)
イムヌエル綜合伝道団 2002年

本書は、デイビッド・A・シーモンズ著 *Putting Away Childish Things: Change Old Behavior Patterns That Keep You From Growing Up In Christ* の日本語訳です。著者シーモンズは、アメリカのメソジスト教会の教職で、説教者、牧会援助者、セミナーの教授として尊く用いられました。



初版が2002年ですから、翻訳したのは20年以上前になります。少し古いのですが、自分の人生で一つの区切りになったこの著書をご紹介します。

この本から東洋英和まで

私と東洋英和のつながりは、博士後期課程で過ごした3年間です。

臨床心理士の資格を取得するために、ある大学の修士課程に進みました。修士論文のためにリサーチしているとき、一つのテーマに出会いました。キリスト教神学と臨床心理学の両方にまたがる「神イメージ理論 (God Image Theory)」という学問領域で、諸外国では1970年代から研究が進められていたにもかかわらず、日本ではだれも取り組んだことがないテーマでした。

修士課程を終え、一度現場に戻りました。しかし心のどこかで、継続研究が可能なのではないかという思いがあり、ミッション系の大学を中心に博士後期課程を探しました。

ほとんどの大学が門前払いで、そのような研究がやりたいならアメリカに行くしかないのではないとも言われるなかで、唯一、人間科学領域で引き受けることができると言ってくださった先生が東洋英和におられました。吉岡良昌先生(当時は東洋英和女学院大学教授、現在は同大名誉教授)です。仕事をしながらですから、自分を追い込んだタフな期間でした。しかし、自分の人生の中で充実した3年間になりました。

キリスト教と臨床心理学の関係は、若い頃から興味が

ありました。学問的な興味というよりは、自分の実存から出てくる興味でした。挫折体験から自分を知る必要があると感じるようになり、キリスト教神学と臨床心理学の関係にさらに興味が湧きました。本書はその歩みのスタート、最初の一步と位置づけることができます。そして東洋英和での研究は、自分がここまではやらなければいけないと考えていた集大成と位置づけることができます。

この本との出会い

時間はさかのぼって20代の最後、牧師になったあと、団体からさらに研鑽を積むように言われ、アメリカのメソジストのセミナーに行きました。3年間を過ごし、神学と宣教学(適応文化人類学)を学びました。

神学専攻は修士論文が必須で、「神の役割理論 (God's Role)」を使って、メソジストの神学者の説教分析をしました。不思議なもので、この論文が東洋英和での研究につながっていることなど、そのときは思いもよりませんでした。その内容は、東洋英和で論文を書くときの理論背景になりました。

当時、アメリカに渡ったときには、臨床心理学の知見が必要だという認識はまったくありませんでした。信仰一点集中突破みたいな考え方にとらわれ、心理学を見下していたようなところがありました。

セミナーでは、デイビッド・A・シーモンズ先生(この書の著者)が教鞭をとっておられました。インドへの宣教師を経験したあと、アメリカに戻り、ユナイテッド・メソジスト

教会を牧会されました。メソジストの世界では、説教とカウンセリングで有名な先生でした。

セミナー在学中、あることをきっかけに信教的・精神的に行き詰まってしまうました。この挫折体験を通して、自分を知る必要があることを痛感し、臨床心理学を学ぼうと決意しました。シーモンズ先生のクラスは、履修することはできなかったのですが、先生の著書を数冊手に入れて帰国しました。

日本の方々にぜひ読んでほしい内容でした。その中から2冊を翻訳しました。*Healing Grace: Finding Freedom From the Performance Trap* (邦題『恵み知らないクリスチャン―行いの罠からの脱却』、絶版)と、*Putting Away Childish Things: Change Old Behavior Patterns That Keep You From Growing Up In Christ* (邦題『子供服を着たクリスチャン―幼児性からの脱却』)の2冊です。

当時は、キリスト教会が心理学に対して賛否含めていろいろな反応をしていた時代で、必ずしも前向きではありませんでした。出版するのに勇気が要りました。今では、思い切って出版して本当によかったと思っています。自分の中で踏ん切りがつかしました。少し大げさなようですが、この書は自分の人生を歩き始めた最初の一歩になりました。



Healing Grace: Finding Freedom From the Performance Trap / 邦題『恵み知らないクリスチャン―行いの罠からの脱却』(絶版)

この本の推しポイント

タイトルを見てもわかるとおり、キリスト者の中にある幼児性に焦点を当てています。聖書には、「信教的に大人になる」という意味のことばが出てきます。実際はどうか

河村 従彦さん

神学校を卒業後、牧会しながら臨床心理学を学ぶ。現在は、KCPSカワムラカウンセリングルームを運営。恵みフォーラムチャンネル (YouTube) 説教者、牧師・臨床心理士。



英和生へのメッセージ▶



という、なかなかうまく行きません。なぜ自分は信教的に成長できないのだろう。聖書に書かれていることと自分の現実とは、どうしてかけ離れているのだろう。長い間、葛藤していたことでした。

シーモンズ先生はご自分の体験から、自分の中にある子ども(幼児性)とはどういうものか、心の傷、自己アイデンティティ、パーソナリティの未成熟、性格の歪みなどに焦点を当て、その幼児性がどのように癒やされて行くかを解説しています。

参考までに、目次を挙げておきます。「心の傷のいやし」、「大人を壊す子ども時代のモットー」、「愛と結婚における幼さ」、「神のみこころの理解における幼さ」、「祈りににおける幼さ」、「幼稚な混同と成熟した区別」、「感情依存という幼さ」、「自己と献身に関する幼さ」などです。

人間の心は、神学の表現だけではなかなか届きません。それに対してこの書は、心理学の知見を援用し、人間の現実に関わらせ与えてきます。自分の信仰について、自分のパーソナリティ傾向について、自分の心の傷について、そして自分の人生について、どのように考えて行けばいいのかということに豊かな指針を与えてくれました。

その頃、周囲のキリスト者と教会にこのような見方が広がって行けばという思いがありました。それからあっという間に20年が経過し、東洋英和で、それまで自分が取り組んで来たことをまとめてみて、この書が提示しているヒントは今も色褪せていないと感じています。

お薦めの本 2冊

Recommend



[左] だいたいぶだよ

【著者】晴佐久 昌英
【発行】女子パウロ会 2007年

ホッとする、が読んでみた最初の印象。何度も読み返したくなります。詩のことばに、心の琴線に触れるリズムがあります。おもわず笑ってしまったりします。どことなく射ているからだろうと思います。「しみじみ教」、「ぼくらの街のセブンイレブン」、「そのままこのまま」などは秀逸。著者のセンスがいかに表現されているさりげないことば使いに、何となく福音の本質が垣間見えて、心がぽかぽか温かくなります。

[右] 釜ヶ崎と福音

神は貧しく小さくされた者と共に

【著者】本田 哲郎
【発行】岩波書店 2007年

釜ヶ崎で30年以上にわたり支援活動をしているフランシスコ会の本田哲郎神父が、聖書が伝えようとしている本質について問題提起をしています。ご自分がなぜこのような奉仕に身を献げるようになったか、そのきっかけとなったご自身の体験は心に迫ってくるリアリティがありました。聖書が提示している福音とはどのようなものか、イエスはどのような方だったか、謙遜とはどのようなことかなど、既成の考え方を揺さぶってくれる名著です。

教員紹介

法の力で世界の秩序を守るには？



Kiwako Tanaka

大学

国際社会学部 国際社会学科

田中 極子 准教授

津田塾大学(国際関係学)卒業、英国サセックス大学(国際関係学)修士、国際基督教大学(行政学)博士。中学・高校・大学と女子校育ち。これまでに訪問した国の数は50か国以上。市役所、外務省、防衛省で勤務したのち、国連で大量破壊兵器の不拡散に取り組んできました。



はじめての自分のゼミ生たち

学生からのメッセージ



国際社会学部国際社会学科 4年
皆川 花さん(左)
浜田 美羽さん(右)

田中先生自身を表す言葉といえば【明朗快活・お茶目で乙女心のある先生】です。先生はいつも朗らかで、学生の主体性を尊重してくださり、まるで私たちの追い風になってくださる存在です。また、学生の「やりたい」を一緒に考え、叶えてくれる先生だと思います。

—国際関係学に興味を持たれたきっかけは？

高校3年間をオーストラリアですごし、人生の早い段階で日本を外から見る機会がありました。国際関係学を学ぼうと思ったのは、オーストラリアにはアジアからの移民や留学生が多く、日本・中国・台湾の相互関係に興味を持ったことが大きかったです。いまは多くの学部・学科で国際関係学を学べますが、日本の大学にはじめて国際関係学科ができたのは1969年のことですので、国内ではまだ新しい学問といえます。

—大学でどのようなことを教えていますか？

私の専門は国際関係・国際政治で、地方行政、政府機関、国連で実務として携わってきました。東洋英和では国際法を教えていますが、法の解釈というよりも、「実社会で国際法がどう運用されているか」という視点で教えています。紛争で一般市民が犠牲になったとき、国際法で彼らを守る手段はあるのか。国家間の貿易において争いや問題が起こったとき、解決するための法律や仕組みはあるのかなど、さまざまな観点で国際法の役割や課題を学んでいます。また私はウイスキーが大好きなのですが、輸入酒への関税を撤廃する動きについて授業で取り上げたこともあります。関税をかけるのは国内産業(日本酒や焼酎)を守る意味がありますが、貿易の自由化を妨げる面もあり、そもそも国に輸入品の税率を決める権限がどこまであるのか……といったことまで学生とともに考えました。

—ゼミではどのような指導をされていますか？

2023年4月に着任し、はじめて自分のゼミを持ちました。ゼミで学生と深く関わるのははじめての経験ですから、毎日が試行錯誤の連続です。私は教える立場にありますが、学生の興味や関心をうまく引き出し、意見を尊重し、学びや研究がうまくいくよう伴走するのが役割だと思っています。とはいえ、同じ学生を2年間指導し社会に送り出す責任を考えると、「もっと厳しくしたほうがいいかしら？」と思うこともあり、正解のない教育の難しさを痛感しています。

—英和生へメッセージをお願いします

素直で、周りとの調和を大切にする学生が多く、いつも感心しています。同時に批判的思考を養い、たとえ周りと異なる意見であっても、「こぞぞ!」というときは発言できる勇気を持ってほしいとも思います。大学はその練習の場ですから、言葉にしてくれれば必ず私が受け止めます! 周囲への思いやりも、意見を主張する強さも、現代社会を生きるうえでどちらも大切です。うまく使い分けられる人になってください。

伝えたいのは学ぶことの楽しさ



Atsushi Iikawa

中高部

社会科・地理歴史科専任／入試広報委員会主任

飯川 厚 教諭

慶應義塾大学文学研究科史学専攻修士課程を修了。2005年に東洋英和女学院中高部に社会科・地理歴史科教師として着任し、中学では主に歴史、高校では世界史を担当。2019年に東京学芸大学大学院教育研究科(教職大学院)教育実践専門職高度化専攻教科領域指導プログラム社会科教育へ1年間留学。2022年から中高部の入試広報委員会主任。



野菜や花など植物を育てることが好きで、校内で咲いている四季折々の花を撮影しています

生徒からのメッセージ



高等部3年
角田 美光斗さん

飯川先生には高校1年生と3年生の世界史の授業でお世話になりました。先生は正解だけでなく、答えの裏にある背景に光を当ててくださる方です。授業中、「なぜそう考えるのか?」と各自の価値観を引き出すことを大切にされ、自身の考えを深めるきっかけを多くいただけたと感じます。また、授業外で相談をした際も生徒の声に親身に耳を傾けてくださり、再び努力する勇気をいただいています。

—歴史の教員を目指されたきっかけは?

中学の自由研究でモンゴル帝国について調べたとき、歴史を深掘りする楽しさを感じました。高校に進むと恩師である世界史の先生との出会いがあり、大学では歴史を研究しようと決めました。人に教えることを意識したのは、大学時代に塾講師のアルバイトをしたときです。勉強に悩みを抱える子たちに寄り添い、ともに学ぶことにやりがいを感じたのを覚えています。ただ教師になるつもりはなく、教員免許も「取れるなら取っておくか」程度の動機でしたから、人生に無駄なことはなく、なんでもやってみるものだと実感します。

—授業で心掛けていることはありますか?

歴史の魅力は、一つの史実をさまざまな角度から見つめ、「実はこうだったのかもしれない」と想像を自由に膨らませられるところにあります。生徒には物事を多面的に見る力を養ってほしいので、多くの問いを与え、自分で考えてもらうことを大切にしています。また、教科書にないエピソードを紹介したり、映像や写真を見せたりすることで、生徒たちのなかに「へえ、そうなんだ」という共感が生まれるよう心掛けています。

—入試広報委員会の活動内容を教えてください

入試部門と広報部門に分かれており、業務も異なります。入試部門では、中学入試の状況分析、英和の入試の企画・運営が主な仕事で、試験や面接の内容や規定を決めたり、問題を作成する教員とやり取りしたりします。一方の広報部門は、東洋英和のブランディングから外部メディアの取材対応、公式サイトや学校案内の制作、原稿のリライトなど、多岐にわたる業務を行っています。中高部サイトのニュースの一部は、私が写真を撮って原稿を書いているんですよ。

—ICTの活用にも積極的だと伺いました

コロナ禍で対面の授業ができなくなったとき、ほかの先生と協力しながらオンライン学習環境づくりに取り組みました。その際、中高部では以前からICT化を進める動きがあり、高等部の生徒がChromebook(学習端末)を持っていたことが推進を後押ししたと思います(現在は中高部全員が所有)。今も対面の授業で学習端末を活用していますが、端末を介したほうが全員の反応を引き出しやすく、意見を可視化できるメリットを感じます。また、プリントよりも率直な意見を書く生徒が多く、授業で面白い意見を取り上げると、ほかの子も面白がって書くという良い連鎖も生まれています。これからも、予定調和ではない質問や反応がどんどん出てくる授業を行い、生徒たちに学ぶことの楽しさを伝えたいです。

2024年8月24日に中高部新マーガレット・クレイグ記念講堂にて宮脇さんのメダル獲得をお祝いするセレモニーが行われました



表彰台の常連となるアスリートを目指して

2024年のパリ五輪のフェンシング女子フルーレ団体で銅メダルを獲得した宮脇花綸さん。テレビ放送で見た雄姿が記憶に新しい人も多いことでしょう。しかし、リオデジャネイロ大会、東京大会では代表メンバーに落選。当時ヘッドコーチのフランク・ボアダン氏は、日本人選手のメンタルの弱さに対して「おとなしいパンダ」と表現したといえます。

フェンシングの団体戦は、メンバー全員が強くなければメダルを取れません。「少しでも多く取ってチームに貢献したい」という思いが、いつしか勝利への執念に変わり、彼女はパンダからトラへと変わっていきます。オリンピックのメダリストになったという実感を得たのは、表彰台に立ったとき。会場で振られる多くの日本国旗や、応援にかけつけた家族や東洋英和の友人、高校や大学の同窓生の喜ぶ顔を見て、オリンピックでメダルを取るのには特別であることを、身をもって感じた瞬間でした。

宮脇さんがフェンシングを始めたのは、小学部に入學する直前の5歳のとき。自宅近くにフェンシング教室があり、お姉さんが習っていたことがきっかけだったそう。中学部のときは既にフェンシング中心の生活でしたが、学校にいる間は勉強に集中し、友だちが弾くオルガンやピアノに合わせて歌を歌ったり、クラス全員で先生にドッキリを仕掛けたり……。野尻キャンプに参加したとき、遠泳で大変な思いをしたのも良い思い出そう。高校進学するとき転校を決意しますが、東洋英和の先生にかけられた「母校がふたつになりましたね」という言葉が強く印象に残っています。その言葉に偽りはなく、東洋英和の先生や友人とは今も親交が続いています。

フェンシングのおもしろさは、速さやパワーを競うだけでなく、戦術や精神力の要素が絡み合い番狂わせが起きやすいところ。勝率を上げるためには技術だけでは不十分で、最後に勝敗を分けるのは精神力。宮脇さんは身長161センチで、運動神経も特に良くないとい

ますが、身長が高くパワーのある海外の選手と戦って勝てる可能性が十分にあります。どの選手にも長所があり、それを伸ばせば強くなれるところがフェンシングの魅力であり、彼女が競技を続ける理由の一つです。

近年、国際大会の個人戦でメダルが取れておらず、パリ五輪の団体戦で銅メダルを取ったことは嬉しいものの、金メダリストやチャンピオンになるにはまだまだ準備が足りないとも痛感。まずは、定期的に行われる国際大会で表彰台の常連といわれる選手・チームになり、4年後のロサンゼルス大会では金メダルの獲得を見据えています。

アスリートとして競技を続けていくことは簡単ではありません。海外で開催される国際大会に出場するには、企業に所属して費用をサポートしてもらう必要があります。なお、日本にフェンシングの国内リーグや実業団はありませんが、現役アスリートと企業をマッチングする日本オリンピック委員会(JOC)の就職支援制度により、働きながら競技を続ける選手が増えてきているそう。けがや契約解除のリスクと常に隣り合わせであるのは今も昔も同じですが、アスリートを取り巻く環境は少しずつ変わってきているといえます。

夢を実現するためには、選択と決断が大切だという宮脇さん。高校時代に五輪メダリストである太田雄貴氏の話に感銘を受け、フェンシング一本でいくと決めるまでは、理数系科目の勉強、お菓子作り、ドラム演奏など、さまざまなことに興味がありました。現役の英和生へのメッセージとしては、焦って道を一つに絞る必要はなく、いろいろなことにアンテナを張りながら、決断すべきときが来たら、そのときは自分自身で判断を下してほしいと語ります。

フェンシングという道を歩みながら、未来のビジョンをはっきりと思い描いている宮脇さん。最高の結果を出すために、毎日トレーニングを重ね、先制攻撃をするための戦略を練っています。

Profile 宮脇 花綸

東洋英和女学院小学部4年のとき全国少年フェンシング大会で優勝。中学部から国際大会を経験。慶應義塾女子高等学校を経て、慶応義塾大学経済学部卒業。2018年アジア競技大会では女子フルーレ団体で初優勝。2019年には国内ランキング1位。2023年世界選手権女子フルーレ団体で銅メダルを獲得。三菱電機所属。



在校生にフェンシング実演



たくさんのお同級生の方も駆けつけてくださいました

【創立140周年記念 楓の会主催講演会】

小巻亜矢さんの
講演会・トークセッション
を開催



第1部は、小巻亜矢さんの講演会



会場が大いに沸いた橋本五郎さんとのトークセッション

2024年11月23日(土・祝)午後、創立140周年記念事業の一環として、(株)サンリオエンターテイメント代表取締役社長、サンリオピューロランド館長を務める小巻亜矢さんの講演会が開催されました。講演とトークセッションの2部構成。英和を代表する卒業生のお話に、中高部新マーガレット・クレイグ記念講堂に集まった約450人が熱心に耳を傾けました。

第1部、講演の題目は「大丈夫、人生いつからでも何とでもなる」。中高部時代の小巻さんは生徒会活動や楓祭実行委員会、YWCAなどで忙しい日々を送る積極的な生徒だった一方で、高等部3年生の時は今後の進路についてかなり迷ったそうです。その時に助けになったのは、担任だった雨宮先生の「あなたはやりたいことが見つかったら本気が出せる人だと思う」というお声がけでした。どんな時でも生徒を信じて、寄り添ってくれる温かいお言葉に励まされ、前に進めたとのこと。成長を実感できた中高6年間は生きていく上での軸になっているということで、ご両親や東洋英和、神様への感謝の心とともに、今でも仕事仲間には「大丈夫、信じているよ」と伝えることを大事にされているそうです。

第2部は、「女性のリーダーシップが拓く未来」と題したトークセッション。楓の会顧問 橋本五郎さん(読売新聞特別編集委員)にもご登壇いただき、小巻さんが人生の中で経験してきた困難や壁をどのように乗り越えてきたのか、という話を通じて、これから自分の道を切り開こうとする女性たちへのメッセージをいただきました。

小巻さんは(株)サンリオ入社後、結婚、子どもとの死別、離婚、そして乳がんの罹患といった多くの困難や壁にぶつかります。そこで諦めるのではなく、進むべき道を模索することができたのは「人生を通じて与えられたすべての出来事は神様が与えてくださったもの。そのすべてに感謝し、この試練は自分に何を教えてくれたんだろうという視点を持ち続けることで、単なる試練ではなく必ず大事な意味を持つ」という考えで向き合えたからだそうです。

困難に直面したときは、勇気を持って問題に向き合い、深く理解することの大事さを、講演を通して伝えていただきました。現在は、女性の健康や子宮頸がん予防の重要性を訴える活動にも熱心に取り組んでおられます。

『はみだし140年誌』2025年1月に発行!

創立140周年を記念して既に発行された『140年史』が「正史」としたら、『はみだし140年誌』はその時々「思い」に主眼を置きたいいわゆる文集です。正史に記録されない(或いは憚られて記録できない)裏歴史なるものも含まれます。基本的に書き残したい人が書くのをコンセプトとしました。幼稚園生の絵から高齢のOGの作文や韻文まで寄稿は多岐にわたりました。「あるある英和事典」というコーナーも設けました。これは東洋英和の独特の文化の中だけで通用する(或いはかつて通用していた)言葉を集めたものです。極めて内輪的な言葉の使い方ではありますが、そこにこそ英和の文化が宿っていると言えるでしょう(クスクス笑ってしまいます)。皆様からお寄せいただいたものをまとめましたので、個人の感想も含まれますことをご了承ください。生き生きした英和の姿が伝われば幸いです。寄稿全てを掲載したデジタルブックとセレクトしたタブロイド版の2つがあります。ご堪能ください。

(学院HPや楓アプリからもご覧いただけます)



メサイアをうたう会

Spring Concert

- 【曲目】 J. S. バッハ
カンタータ161番、106番、4番 ほか
- 【日時】 2025年4月12日(土)
13:30 開場 14:00 開演
- 【場所】 東洋英和女学院中高部
新マーガレット・クレイグ記念講堂



チケット販売中 全席自由 2,500円
購入のお問い合わせは、メサイアをうたう会事務局(090-4018-3017)まで



「くっちゃん」のブログ集が寄贈されました！

—『沓澤謙一郎 ブログ全集』I～V編の紹介—

元中高部理科教諭の沓澤謙一郎先生(愛称「くっちゃん」)がご退職後、2005年(79歳)に始められ、2023年9月(97歳、召天される10日前)までの19年間にわたりアップしていたブログを、「乙女軍団」なる同窓生たちが本にするらしい……と教えてくださったのは、元中高部理科教諭の橋詰正治先生でした。

2024年の7月、教え子の方々が、元中高部数学科教諭の内藤達先生とともに、沓澤先生のブログを末永く皆の記憶に残せるよう、史料室にご相談にいらっしゃいました。そして、一周忌である9月に合わせてブログを書籍化(誌面にするとトータル2029ページ!)することが目指されたのです。果たして9月30日、ブログ集(全5巻)が史料室に寄贈されました。教え子の皆様とともに刊行を支えた橋詰先生、内藤先生もご同席され、皆で完成を大いに喜びました。

ブログでは理科や数学はもちろん、ミス・カートメルのご郷を訪ねるカナダの旅、英和の思い出、懐かしのグル

メ、当時の社会情勢など話題は多岐にわたり、先生ご自身が撮影されたたくさんの写真も美しく、先生の穏やかなお人柄と語り口が思い出されます。晩年まで頭脳明晰で過ごされた人生の先輩としてお手本になります。

本部・大学院棟1階の展示コーナー、中高部図書室にソフトカバー版を設置しております。ご高覧ください。



ブログ集を手にする、1982年高等部卒 沓澤クラス有志の皆さん(沓澤先生が「乙女軍団」のニックネームで呼んでいらした)と内藤達先生、橋詰正治先生

- 「史料室だより」No.103「特集 東洋英和の周年行事—創立25周年から140周年の現在まで—」
「報告〈桜プロジェクト〉植樹10周年カナダツアー」は、以下のURLもしくはQRコードからお読みいただけます。
<https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>
- 史料室TEL:03-3583-3166/FAX:03-3583-3329 ホームページ <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/>



後援会より

2024年度後援会総会・役員懇談会のご報告

2024年7月5日(金)、後援会総会を開催いたしました。総会では、それに先立ち役員会にて審議可決された役員改選、2023年度収支決算、2024年度収支予算が報告されました。また、10月4日(金)には、後援会役員懇談会が開催され、後援会役員と学院との間で忌憚のない意見交換を行いました。後援会総会・後援会役員懇談会ともに、会終了後には懇親会が設けられ、学院の教職員の方々と親睦を深める有意義な機会となりました。



2024年度後援会常任役員

大学同窓会 楓美会より

みどりアートパークより感謝状をいただきました

地域連携活動が評価され、みどりアートパークより感謝状をいただきました。母校の学生と先生方の活躍の場を広げるため地域連携活動を進めて参りました。西洋子教授のインクルーシブダンスワークショップ「のはらハみどり」では在学生や卒業生も活躍しております。また、ハンドベル部の演奏は「緑区役所お昼のロビーコンサート」やカナダ大使館で大好評です。区役所や学生・先生方より楓美会の活動に対し「協力ありがとうございます」と嬉しいお声を沢山いただいております。



左:楓美会理事長亀岡さやか 右:西洋子教授

学院同窓会より

MAPLE FESTIVAL 2024のご報告

2024年11月4日、10年ぶり2回目の東光会による楓祭、ホームカミングデーが開催されました。当日は晴天に恵まれ、11時の開場前から列ができ、開会礼拝および記念講演には約500名の東光会会員が集いました。

米山浩子氏のオルガンの奏楽で最初の讃美歌187番を歌い終わる頃には、多くの方が英和生に戻っていました。大和友子氏の説教題は「旅路の最後まで」、英和で学んだ者として、主に全てを委ねて過ごしていきたいと教えていただきました。

*この続きも含め今後の東光会の情報発信に乞うご期待、150周年に向け「法人化」を進めて参ります。



開会礼拝(大和友子氏)